出会いからはじまる
フィールドスタディ

大阪大学未来基金グローバル化推進事業
海外フィールドスタディプログラムA　2021年度報告書
環境問題への回路II　2021年度報告書

監修：思沁夫
編集：阿部朋恒

目次

第一部　2021年度「環境問題への回路II実践演習」成果報告 4

観光振興プロジェクト　　劉桐坤、明語盈、李澤宇

1 概要 4

1.1 宍粟市概要. 4

1.1.1 位置、面積、人口 4

1.1.2 沿革、歴史、特徴 5

1.2 活動日時及び内容. 5

1.2.1 一回目の調査 5

1.2.2 自主調査 5

1.2.3 二回目の調査 6

2 宍粟市観光の現状 6

2.1 統計データ 6

2.1.1 観光客数データ. 6

2.1.2 目的別割合（2017） 7

2.1.3 GAP調査：宍粟市に持つイメージ（2015.7） 7

3 現在の観光政策及び取り組み 8

3.1 観光資源の有効活用. 8

3.2 体験型ツーリズムの推進. 8

3.3 観光客受入体制の充実. 8

3.4 魅力の発信の強化. 9

3.5 ふるさと宍粟の観光基本計画. 9

3.6 新型コロナウイルス感染症対策緊急支援 10
4 提案 10
4.1 博物館を建てる 10
4.1.1 現有博物館の考察 10
4.1.2 新しい博物館の構想 11
4.1.3 メリット 13
4.1.4 実現可能性及び課題の考察 13
4.2 フォトカレンダーを製作する 15
4.2.2 メリット 17
4.2.3 課題 17
4.3 その他の考え 18
4.3.1 知名度を高める 18
4.3.2 交通網を完備する 20
4.3.3 観光都市のためのインフラ整備 20
4.3.4 観光資源の付加価値を高める 20
4.3.5 地域社会と連携する 22
5 本プロジェクトの感想 23
6 参考資料 25

第二部　2021年年度「海外フィールドスタディA」成果報告(1) 26
絵本づくりプロジェクト　　藤阪希海、冨士純美詠、李澤宇
1 概要 26
1.1 授業の経緯 26
1.1.1 本来の課題 26

1.1.2 新しい課題 26
1.2 絵本作成にあたっての背景 26
1.2.1 絵本を作成する理由 26
1.2.2 ストーリーの候補 26
1.3 活動内容 27
2 絵本の作成手順 28
2.1 シーンの分担方法 28
2.2 絵本のあらすじ 30
2.3 ストーリーの構成背景 30
3 活動に通じる学び及び成果 32
3.1 スチンフ先生からの学び 32
3.2 調査結果 33
4 感想 34
5 参考資料 39
第三部　2021年年度「海外フィールドスタディA」成果報告(2) 40

絵本原案　　藤阪希海、冨士純美詠、李澤宇

観光振興プロジェクト

劉桐坤、明語盈、李澤宇

1 概要

1.1 宍粟市概要

1.1.1 位置、面積、人口

宍粟市は兵庫県の中西部、西播磨に属する。北はやぶ市、鳥取県、東はあさご市・かみかわ町、南は姫路市・たつの市、西はさよう町・岡山県と接している。

宍粟市の面積は、兵庫県土の約7.8%を占める658.60km²で、姫路市よりやや大きい。しかし人口は３万６千人弱、図1のように兵庫県総人口のわずか0.7%を占めており、宍粟市に隣接している姫路市の約1/15である。世帯から見ると平均一世帯当たり2.45人しかおらず、少子高齢化問題や若者の外への人口流出問題が顕著だと考えられる。

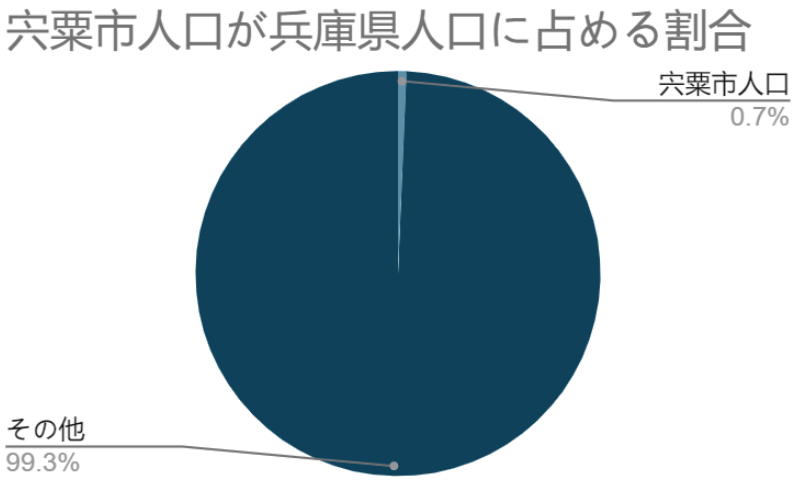


図1　宍粟市人口が県人口に占める割合

1.1.2 沿革、歴史、特徴

宍粟市は4つの町(山崎町・一宮町・波賀町・千種町)が平成17年4月1日に合併し、誕生した。四つの町はそれぞれ独自の歴史、文化、特色がある。

山崎町は江戸時代には山崎城と城下町が造られて、城下町として発展を見せ、また、古くから当地域の経済、文化、交通の中心として重要な役割を果たしてきた。

一宮町は縄文時代から中世にかけての大規模なえばら遺跡が発見されるなど、兵庫県の縄文時代の指標ともなる重要な遺跡、国重要文化財の御形神社などの歴史・文化遺産を数多く有している。

波賀町は平安時代には、京都石清水八幡宮の荘園として組み入れられ、十三世紀より波賀城を構え、歴史・文化が築かれてきた。

千種町は古代以降明治期まで主として日本刀の原材料として名声をはせた「千種鉄」の産出地や「たたら製鉄所」の遺跡が町内のいたる所で見られるなど、和鉄の郷として繁栄してきた。

1.2 活動日時及び内容

宍粟市での現地調査は二回に分けて、一回目は2021年の11月13日と14日、波賀町で調査した。そして大学で自主調査を行い、今年1月14日から16日にかけて、一宮町と山崎町で2回目の調査を行った。

1.2.1 一回目の調査

一回目の現地調査では、こんにゃく、餅、ちらし寿司の弁当などを商品として包装し、品揃えした。立教大学のコーヒー豆の販売をプロジェクトとする班と協力して、雲南産コーヒー豆を種類別で商品として包装した。翌日に波賀軽トラ市でコーヒー豆や農産物を販売し、また軽トラ市でイベントを見学した。これによって、チームで協力して、モノづくりに参加し、地域の人々と触れ合うこともできた。

1.2.2 自主調査

自主調査では、授業でフィールドスタディーの意義と調査方法を学び、過去の研修報告書から宍粟市で行われた地域調査について勉強した。さらに、宍粟市ホームページで観光情報及び政策を調べ、二回目の現地調査のために着目点や目標などを以下のように大きく４つ決めた。

①市街地と自然スポットを対照的に見ること

②土産物ショップやレストランでご当地グルメを調べること

③地域の住民をインタビューすること

④宍粟市のバリアフリー状況を調べること

1.2.3 二回目の調査

二回目の現地調査では、一宮町の歴史資料館で宍粟市４町の歴史や文化や特徴などを聞いて、観光協会西山理事から宍粟市の観光事情を紹介してもらうことによって、宍粟市の歴史及び現在の事情を探求した。商工会長田会長と地域についてたくさん交流して、また思先生と上須先生から個人の経験談などを聞くことによって、交流から学びを得た。山崎市街地で散策し、老松酒造などの店の雰囲気を味わって、山崎の観光案内所の係員にインタビューすることによって、観光客として現地で観光体験できた。当地の伝統的な行事であるチャンチャコ踊りの名人をインタビューすることによって、地域の伝統文化についても身をもって触れ合うことができた。

2 宍粟市観光の現状

2.1 統計データ

2.1.1 観光客数データ

	2012	2013	2014	2015	2016	2017
入り込み観光客数	1,202	1,275	1,217	1,276	1,165	1,062
宿泊客	88	89	88	92	85	76
日帰り客	1,114	1,186	1,129	1,184	1,080	986

（単位：千人）

表1　観客数の推移

（出所：「宍粟市後期基本計画基本施策別一覧表」より作成（下同））

2.1.2 目的別割合（2017）

自然	歴史・文化	温泉・健康	スポーツ・レクリエーション	都市型観光（買物・食事等）	祭行事・イベント	その他
7.3	2.2	29.2	16.1	0.0	6.5	38.8

（単位：%）

表2　2017年観光目的別割合

2.1.3 GAP調査：宍粟市に持つイメージ（2015.7）

	イメージ
第１位	森林が多く自然豊か
第２位	紅葉がきれい
第３位	川で釣りや川遊び
第４位	登山やハイキングが楽しめる
第５位	宍粟という字が読めない

表3　GAPランキング

（出所：（公財）しそう森林王国協会「宍粟の観光まちづくり」より）

調査対象者の中で宍粟市へ行ったことがある人は13%を占め、そのうち1回訪れた人が一番多い。そして、宍粟市に行ったことがない人は86.8%、宍粟市を知らない人は67.1%を占める。行ったことがない、知らないけれど行ってみたい人は約4割を占める。つまり、宍粟市の観光発展の最大の課題は、宍粟という場所があることを外の人に知ってもらうことである。

一方、宍粟市へのイメージに関しては、多くの人が宍粟市の森林や自然に強い印象を持っている。温泉やグルメなど他の観光資源を生かすためにも、宣伝する時その方向性に重きを置くことができるということだ。ちなみに、この調査で面白いことに、「しそう」という単語を読めない人が少なくない。この点も観光PRのネックになっていることだと思う。

3 現在の観光政策及び取り組み

3.1 観光資源の有効活用

①観光プラットフォームの充実のための「ふるさと宍粟観光ステーション」の整備、観光情報のネットワーク化による市内周遊の促進

②観光バスの運行ルートや駐車場の確保等、自動車による観光がしやすい環境づくり

③「食」や地域の歴史・文化を観光資源として生かすとともに、特産品ブランド認証制度の積極的なPR

3.2 体験型ツーリズムの推進

①自然体験や地元の農業体験と宿泊を組み合わせたツアー構築、たたら製鉄、産業遺産、発酵、日本酒づくりをテーマにした観光など（例：音水湖カヌー体験、藍染体験）

②歴史・文化の面で宍粟市と共通するテーマを持つまちとの連携（例：全国発酵のまちづくり推進協議会、セラピー基地ネットワーク協議会）

③森林セラピーとその他の体験の連携などグリーンツーリズムの充実

3.3 観光客受入体制の充実

①観光ガイドや参加・体験メニューの指導者・協力者など観光振興を担う人材の育成・支援及び地域活動団体との連携や、観光受入体制の充実

②インバウンド獲得に向け、市内事業者との連携及び他自治体との広域連携（例：不動滝、氷ノ山などの自然資源と日本酒、宍粟牛との組み合わせ）

③市民の参加による民泊を促進し、滞在型観光の充実（例：農業体験が出来る農家民泊と森林セラピー体験等を組み合わせ自然資源）

3.4 魅力の発信の強化

①文化財や歴史を効果的に結び付け、総合的、戦略的な観光プロモーション（例：日本酒発祥の地”庭田神社”、たたら遺跡などの歴史と観光地をめぐるモデル コースをPR、たたら製鉄を体験できるイベントの開催）

②はりま酒文化ツーリズム事業などの広域的な観光事業（例：観光ホームペー ジ「西播磨遊記」でのPR、姫路市に設置した宍粟市PR館でのPR）

③地域の観光魅力の情報を市民と共有し、SNS 等を通じた口コミによる観光プロモーション（例：藤まつりやもみじ祭り等で来場者にSNSを通じて写真等の拡散の呼びかけ）

3.5 ふるさと宍粟の観光基本計画

①ひとづくり

・身近な地域の良さを知る

・おもてなしの心を育む

・観光ガイドを育てる

・観光人材バンクを作る

②ものづくり

・取り組みの拠点と観光の経路を確立する

・観光資源の付加価値を高める

・土産物・特産品をつくる

③ことづくり

・業種間・地域間の連携を促進する

・観光イベントを効果的に盛り上げる

・戦略的にマーケティング活動を展開する

3.6 新型コロナウイルス感染症対策緊急支援

観光等を目的として市内の宿泊施設に宿泊する方の宿泊費に対して助成し、新型コロナウイルス感染症拡大による大きな影響を受けた市内の宿泊施設への宿泊を促進する。

【内容】
・一般宿泊施設 助成額　2,000円
1回につき1人2,000円とし、連泊の場合も1回とみなす。
・一棟貸宿泊施設　助成額　5,000円
1回につき1棟5,000円とし、連泊の場合も1回とみなす。
＊いずれの場合も助成額に満たない場合は、助成対象外。
【対象】
・一般宿泊施設　市内16事業者
・一棟貸宿泊施設　市内6事業者

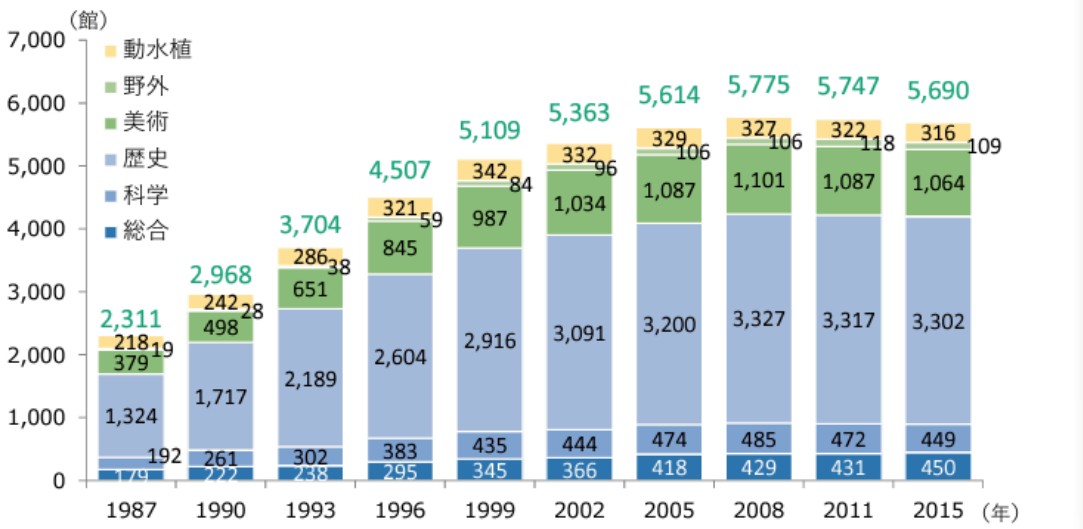
4 提案

提案には、二つの主要な提案と各方面でいくつかの小さい提案がある。主要な提案としては、宍粟市総合博物館を建設することとフォトカレンダーを製作することを考えました。総合博物館は文化施設として地域の文化芸術を発信する核であり、新たな文化芸術の創出につながる拠点となる。フォトカレンダーは芸術的な美しさと実用性を兼ね備えた、宍粟市の四季の美しさを写真に収めることができる。

4.1 博物館を建てる

4.1.1 現有博物館の考察

図2で分かるように２１世紀に入って以来日本の博物館数は前世紀よりだいぶ増えてきた。その中で淡青色に注目すると、歴史に関する博物館は占める割合も多く、そして増加も著しく、現在は1987年より約３倍に増えた。従って、各地域は歴史文化財の保護やソフトパワーとしての発信を重視していることが考えられる。



（出所）文部科学省「社会教育調査」（年次統計及び平成 27 年調査結果）より、みずほ総合研究所作成

図2　日本の博物館数の推移

宍粟市内現有の資料館などを調べたところ、宍粟市歴史資料館とたたらの里学習館があった。山崎歴史民俗資料館もあるが、運営上の問題で現在一般公開を行っていない。

宍粟市歴史資料館は私たちが実際に行って話を聞いた。一宮町に位置し、姫路駅から車で90分、山崎インターから車で40分かかる。展示物は一宮町の家原遺跡を中心に展示している。入館料は一般３００円である。たたらの里学習館は千種町に位置し、山崎インターからバスで90分、岡山県大原駅から車で40分かかる。主に「たたら製鉄」の遺跡を展示している。入館料は一般２００円である。現有の二つの資料館はどちらでも、町内のものだけを展示しているので、宍粟市全体の歴史文化を外来客が把握できないということがあり、しかも駅から遠くてアクセスしにくい。

4.1.2 新しい博物館の構想

今回の博物館の提案は二つの原則に準じている。市全体の歴史や遺跡を統合して展示することと、各町の特色を保留して強調することである。具体的には、4町の歴史資料や遺跡をまとめて一つの博物館で管理し展示して、また４町それぞれの展示館や展示コーナーを設置し、各展示館のインテリアやレイアウトをその町の特色を踏まえて別様に設計することである。イメージ図を図3のように作った。4つの館があり、例えば、一宮館ではえばら遺跡、山崎館では名人

の物語、波賀館では森林鉄道の遺跡、千種館では製鉄の遺跡などを展示して、各町の特色を強調するようにする。

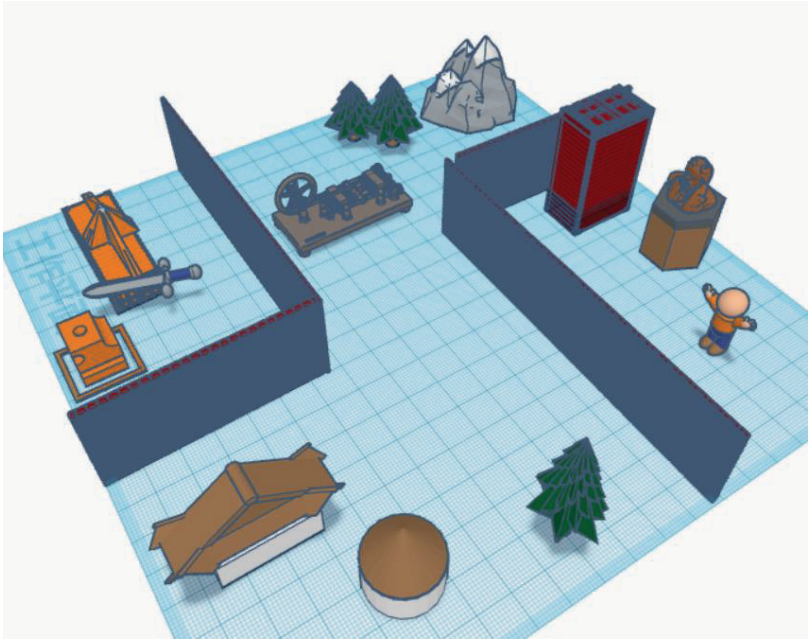


図3　新しい博物館のイメージ図

また、運営上の具体的な提案としては、博物館の立地は山崎インター付近に設定すると良いと思う。その理由は山崎町は宍粟市の扉のような存在で、宍粟市に来る人はほぼ山崎町を経由し、人の通行量が多いので、注目度が上がるはずである。

展示物は各町特有の文化財や遺跡及び歴史文献として、各町独自の特徴を強調する。用語は外国人客のため多言語対応にし、また来客の利用目的から、子供や家族が楽しめる目的と学習者が勉強できる目的を両立できる、わかりやすい言葉を使うようにする。入館料は来客に経済的負担がかからないように一般３００円程度に設定する。また情報管理や分野を横断した関連情報の連携・共有のため、デジタルアーカイブを導入する。スタンプラリーを設置し、来客をどの町の館にも足を止めさせることが可能になる。クイズイベントなどを開催し、来客の興味を引いた上で4町それぞれの特徴を覚えてもらう。４町の違う歴史文化を体験した最後にスローガンである「我々は一つの宍粟市」を締め括りに強調する。

4.1.3 メリット

総合博物館を建てるメリットは外来客視点と宍粟市市民視点から考えられる。

外来客に対して宍粟市は独自の違う文化や歴史がある町からなる市という点を特別な魅力としてアピールできる。４町の文化や歴史をまとめて知る機会に触れると、外来客としてどこかの町への興味を引かれる機会が増え、実際に身をもってその町に入り込んで体験する気持ちになる可能性がある。宍粟市市民として訪れると、お互いの町の歴史や文化をより深く理解し、その前には他町に関して知らなかった事情も知る機会を得て、情報共有できる。宍粟市民はスローガンも含めて、宍粟市は多く特色のある文化がある町であることを知り、宍粟市民としての誇りを養い、互いに団結して助け合うようになる。歴史資料の保存拠点として、博物館で発信する文化財は、市民により大事にされ未来の世代へのレガシーとして継承されていく。

4.1.4 実現可能性及び課題の考察

今最大の課題は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う移動の制限・自粛や3密の回避といった人々の行動変容が、博物館経営に深刻な影響を与えていることであり、また考えられるほかの課題として一宮町の家原遺跡のような遺跡の移動や複製は困難かもしれない。宍粟市北部の市民の訪問は困難かもしれない。博物館の収益もコストに比べて低いと考えられる。

コロナの影響について、図４には文化庁による2017年までの博物館利用者数の統計データが示されており、図5は2018年からの一部の博物館管理者へのアンケートの結果である。ここで分かったのはコロナの前、利用者数が増えつつあったが、2019年のコロナ以来、一気に減少の傾向が見られていることだ。

（出典）社会教育調査

図4　H29（2017）年までの博物館利用者数の推移

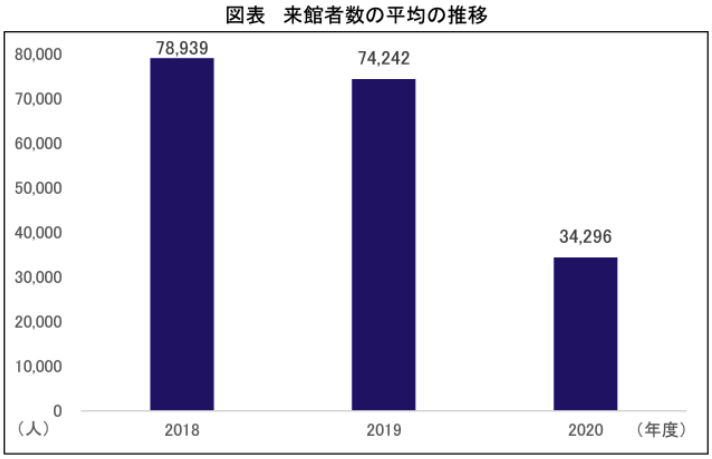


図5　2018年から全国の一部の博物館管理者へのアンケートより

また、図6のようにアフターコロナにおける博物館の予算の見込みアンケートから、「変わらない」（44.5%）が最も多くなっている一方で、「減額」が全体の33%に達している等、博物館の厳しい財政状況がわかる。

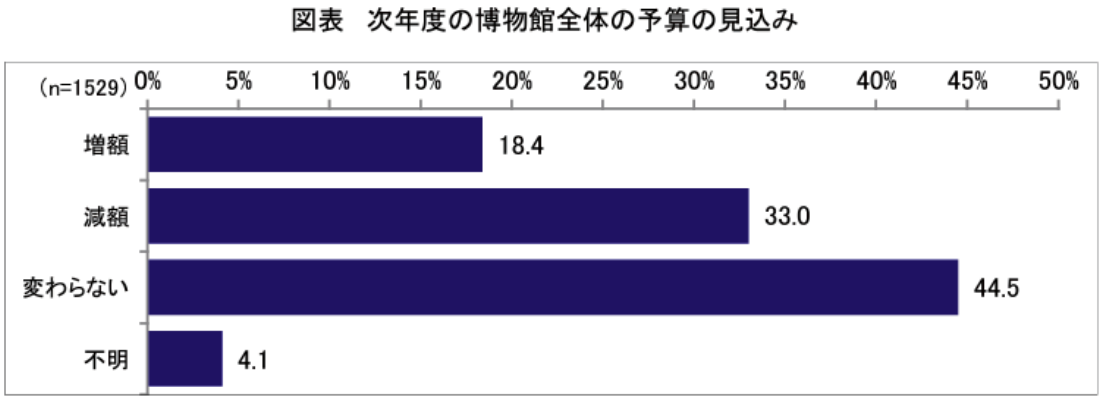


図6　アフターコロナにおける博物館の予算の見込みアンケート

それではアフターコロナで海外の博物館がどんな取り組みをしたかの例を見てみよう。まず中国の上海外灘美術館は美術理論、人類学、社会学、美術史、文化学等の知識分野と連携し、海外及び中国のアーティスト、研究者等を一つのコミュニティに結び付ける研究プラットフォームの構築も推進している。これにより中国の国内だけでなく海外にも活動が発信され、休館中でも国内外の幅広い研究者や学芸員等との連携・協働が可能になり、学芸員の調査・研究業務の充実化につながる、県の博物館協会等、博物館同士の横のつながりを形成する組織をプラットフォームとして活用し、各博物館の取組を支援することが望ましいのである。

そしてイタリアのレジスタンス博物館は市民自己制作ビデオによる展示会を開催した。時代の記憶を保存するための目的で、博物館の呼びかけに応じて、市民から計20件の自己制作ビデオが送られてきて、YouTubeチャンネルで放送する展示会を開催した。それによって、パブリック・ヒストリーに関する市民参加型のプロジェクトを低コストで成功させた。

イギリスのウィルトシャー博物館はクラウドファンディングとメンバーシップ制度を活用した資金調達を開始した。資金調達プラットフォームである「Crowdfunder」ページ上に、都市封鎖下における家族向けの学習ビデオ、博物館のスタッフが登場する紹介ビデオ等を掲載した。単に資金提供を募るだけでなく、資金提供者に対するサービスの提供もした。これによってコロナの中でうまく資金調達できる一方で、博物館への親近感を高め、ファンを獲得できる。

4.2 フォトカレンダーを製作する

4.2.1 カレンダーの構想

カレンダーの表は撮影大会で募集した各観光地の美しい写真及びその撮影者と作品名を明記する（図7）。なお、可能であれば、住民からその地に関する俳句や川柳などを集めて書く。裏面の内容は以下の四つのアイデアがある。

①宍粟市の名物・特産物の紹介及びその写真（図8）

②観光地の紹介(位置、各季節の様子、アクセス)

③宍粟市12ヶ月それぞれの行事やイベント

④有名な温泉旅館・民宿地の紹介(写真、アクセス、連絡先、特徴)（図9）

図7　フォトカレンダー表面構想図

図8　フォトカレンダー裏面提案①構想図

図9　フォトカレンダー裏面提案④構想図

4.2.2 メリット

①実用性があるので、普通のパンフレットのように気やすく捨てられることはない。

②使用頻度が高いので、良く見られて宍粟市への印象が深くなる。

③コレクションに入れる価値がある。

④撮影大会の開催と俳句などの募集で、地元の人の観光事業への関与度を高めることができる。

4.2.3 課題

①配布方法：観光ステーションまたはSNS抽選で数量限定で配る。

②コストがパンフレットとチラシより高い。解決策として、温泉旅館や地酒ブランドなどを誘ってスポンサーをしてもらうこと。そのかわりにカレンダーの裏面にスポンサーの商品・サービスを印刷して宣伝する。

4.3 その他の考え

総合博物館の設立とカレンダーの作成のほか、知名度の向上、インフラ整備、観光資源の付加価値の活用、地域社会との連携の4つの面でもアイデアと小さな提案がある。

4.3.1 知名度を高める

①割引券つきチラシ

すでにある観光ステーションの他、配布されたパンフレットやチラシなどに切り取って使える温泉の体験ギフト券や地酒の割引券をつける。ピザチラシ（図9）のように、得したと感じさせて、より多くの観光客を引き付けることができる。また「宍粟」の読み方を知らないからネットで検索するのはやめてしまうことが多いので、ポスターやチラシに「宍粟」の読み方を明記しておくことも必要である。

図10　割引券つきチラシ例（ピザーラ）

②有名なテレビ番組と連携する

有名なテレビ番組を誘って、ゲストを宍粟市に来させて取材することでメディアで宣伝することである。例えば、「オモウマい店」（図11）と「アナザースカイ」（日本テレビ）などの番組は有名で、宍粟のニーズに合っているようである。このような番組を招致して、宍粟の地酒を味わったり、宍粟の森林浴などを体験したりすることを通して宣伝の効果を達成する。

図11　オモウマい店画像

③SNS抽選

インスタグラムやツイッターで、地酒や無料セラピー体験などを賞品として、抽選を行うものである。宍粟市の公式アカウントをフォローして、投稿をリツイートすると、抽選の資格をもらえる。『元彼の遺言状』というドラマを例として、囲まれた部分で見ると、リツイート量がかなりのものであることがわかる（図12）

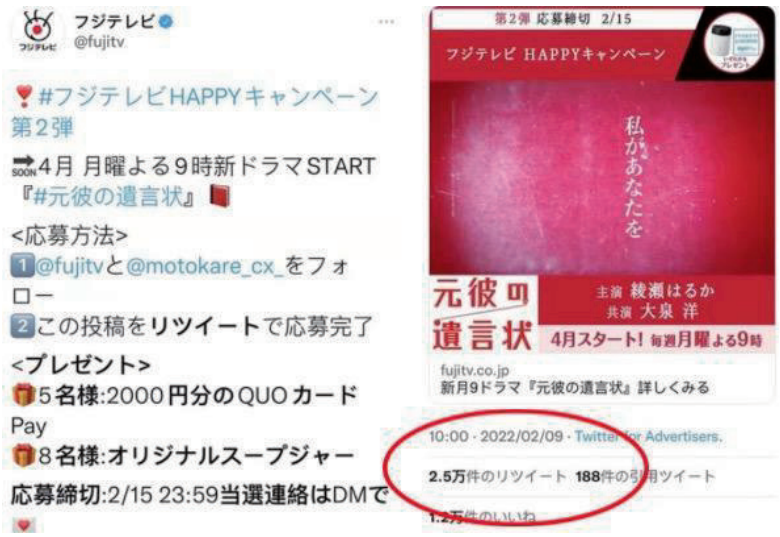


図12　『元彼の遺言状』Twitter投稿

4.3.2 交通網を完備する

宍粟市を走る公共交通は、神姫バスによる路線バス及び高速バスのほか、平成27年11月から路線バスが運行されている。そして市内の移動は自動車が主で、ＪＲがない。しかも山崎町だけはメインストリートを通るため、観光客の来訪に大きな影響を与えている。そのため神戸ー宍粟市の往復観光専用バスがあれば車を持ってない観光者にとって便利になるかもしれない。なお、乗車券と温泉の入場券をセットにすることで、より多くの消費をもたらすこともできる。

4.3.3 観光都市のためのインフラ整備

①自動販売機とコンビニを増やす

市内コンビニがより多くあれば、外来者に便利さを提供すると同時に、地元の労働者により多くの働く機会をもたらし、若者の流出を抑えることにも役立つ。コストが高いならコンビニの代わりに自販機でもいい。

②街灯を増設する

自身の体験より、冬は非常に寒く、車のガラスには霜が降り、街灯が少ないと夜の車道は暗くて非常に危険である。

③観光地周辺に道しるべと案内板を設置する

実際に現地調査をするとき、案内板がなくて観光地を探すのが難しい。なお多言語対応も大事である。

4.3.4 観光資源の付加価値を高める

① 宍粟地酒のブランド化を促進する

メディアや広告で「本格日本酒=宍粟地酒」とアピールし、酒をブランド化することである。

②有料の森林ロープウェイや森林鉄道などを設けたら、旅行の面白さが増える。

図13　ロープウェイ

②　「発酵のふるさと宍粟」プロジェクトを促進する

前述のSNS抽選で「お酒の旅」というコースを開設することである。そしてお酒関連の宍粟特有の商品を開発することで観光客の消費を増やす。例えば、甘酒アイス、酒入りチョコレート、または地酒で作る魚料理である。さらにアイスとチョコのブランドと連携したら利益ポイントがあるかもしれない。

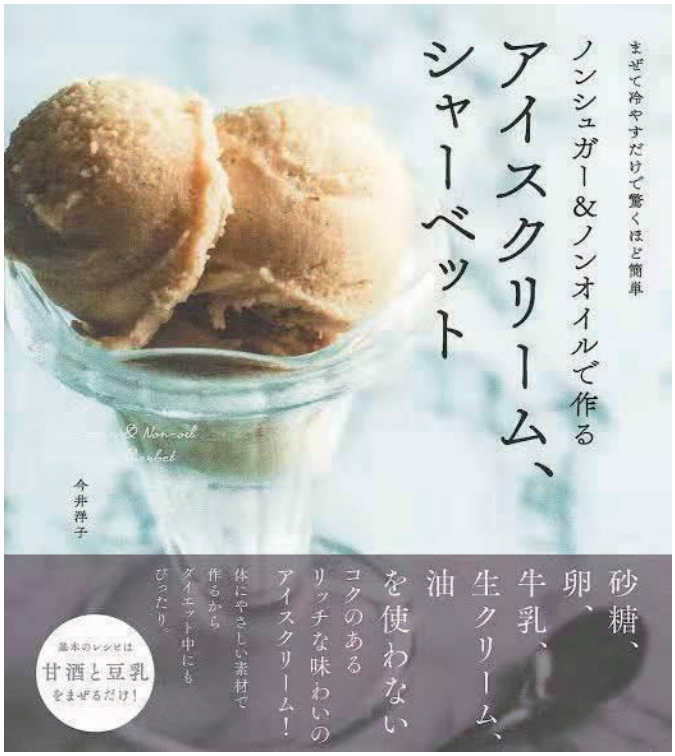


図14　「ノンシュガー&ノンオイルで作る アイスクリーム、シャーベット 」

https://honto.jp/netstore/pd-book_27782537.html

4.3.5 地域社会と連携する

岡山、神戸や姫路などの周辺都市のホテルや観光地に宍粟市のパンフレットを置いておくことである。神戸や姫路へ行く途中で宍粟市を通りすがりに訪れる人を惹きつける。また「兵庫一週間旅行」などの観光ツアーもおすすめである。地方との連携を通じて観光業全体の発展を促進する目的を達成する。

5 本プロジェクトの感想

（李）

人口流出の問題は、経済的に豊かでない地域、また発展機会が少ない地域にとっては大きな痛みだと感じている。日本の状況は東京を中心とする首都圏に一極集中で、出世のため若者たちは首都圏に、また地域の経済中心に流れ込んでしまうことになる。

私が同じく感じているのは私の故郷である瀋陽は前世紀50年代では第二次産業が繁栄して、全国の経済を引っ張る存在だったが、その後経済構造が単一で、失業率が高くなった。そして南の都市の経済構造が改革されることによって、第三次産業が発展し、人口を多く吸収した。地元のエリートたちはみんな南へ行って、起業や投資を行っている。瀋陽に来て町を建設する人が少ない。

宍粟市の場合は更に少子高齢化の影響で、地域に若者があまりいなくなっている。山崎の観光案内所の係員さんへのインタビューによると、「ここの市民はほとんど年寄りで、都会も活力がない。やっぱり若い人が残ってくれたらいいな」という思いを聞いた。やはり人の地域への帰属感は重要だと思っている。それが地域をより良くするための原動力となる。

その帰属感を養うため、やはり地域の独自の文化をうまく継承し宣伝することが大事だと思っている。そして住民たちが地元を愛し、更に文化を宣伝して外の人を引き寄せるという好循環が望ましい。

（劉）

宍粟市に2回しか行っていない上に短い時間だったが、深い印象が残った。宍粟市は大阪市内のようではなく、自然に身を置く感じがした。ここで久しぶりに大雪や仕事に追われないゆっくりとしたリズムの生活や優しくて親切な人を見た。1月15日の昼ごろ、私たちは市内を歩いて、ある観光案内所の係員のお姉さんにインタビューをした。簡単な会話から彼女の若い活力に対する渇望を深く感じた。「今のような静かな生活より、元気で賑やかな町が好きです。若者が帰って来てほしい、より多くの人が宍粟市を知っていてほしい、より多くの観光客が宍粟市の地酒を味わってほしい。他の町の住民とコミュニケーションを取ったり、一緒に祭りを開催したりしたい。」と彼女は言った。

たしかに宍粟市では多くの家庭が自炊して自給自足の生活を送っているようで、さらに交通の不便と新型コロナウイルスの影響もあって、それぞれの家庭間のコミュニケーションが困難になっている。だから外来の観光客を引きつけて宍粟市の観光業の発展を促進すると同時に、地元の住民の間の感情を交流するのも無視できないと思う。特に子供が身の回りにいない老人はきっと孤独であろう。

このプロジェクトを通じて宍粟市のことを知って、新しい友達ができた。一緒に勉強したり、雪を触ったり、 写真を撮ったりして、たくさんのことを学んだ。宍粟はとても暮らしやすいまちだと思っていますし、ささやかな提案が宍粟市の未来に役立つと嬉しい。より良い宍粟を期待しています。5年後、10年後に宍粟市と言えば、皆さんと一緒に勉強したことを思い出せると信じている。

（明）

こうしたフィールドワークの授業に参加するのは、阪大に入学してから初めてだった。最初の授業では、この面白そうな授業で卒業単位を達成したいとしか思っていなかった。しかし、宍粟市を二度訪れるにつれて、美しく静かな町であることがわかってきた。インターネット時代にテンポよく暮らしている今、宍粟市では久しぶりに田園生活の素朴さや人と自然の共生の調和を感じた。

とても魅力的な街だから、このまま沈んでいくのを見たくない。宍粟市の観光振興にはみんなの前で自分をアピールする機会が必要だと思う。宍粟市はここに来ないと魅力がわからない場所だ。しかし、フィールドワークや地元の人たちへの取材を通じて、この街の重要な社会問題が若年層の流出であることに気づいた。

宍粟市のように、私の出身地も若者の流出が深刻な小都市である。十年後、何十年後にこうした高齢化都市はどうなるのだろうと私は常に考えていた。しかし、私の故郷とは違い、幸運にも宍粟市には恵まれた観光資源があり、それを知ってもらう機会があれば、多くの若者や観光客がその魅力に惹かれることであろう。

また、この授業を通して、私は観光協会の会長をはじめとするプロの方々とコミュニケーションをとることができた。これは私にとって重要な学習の機会で、更に自分の考えを発表する機会だ。もし私たちの未熟な提案が市の観光業の発展のために役に立つならば、それは私の一生の誇りに値することである。

6 参考資料

[1]宍粟市ホームページ

https://www.city.shiso.lg.jp/

[2]兵庫県ホームページ

https://web.pref.hyogo.lg.jp/

[3]千種町総合サイト

https://chikusatown.net/tourism/tatara_center

[4]宍粟市後期基本計画基本施策別一覧

https://www.city.shiso.lg.jp/material/files/group/69/sougoukeikakuiinkai12_1-8.pdf

[5]文化庁委託事業　「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」における「博物館の機能強化に関する調査」

[6]みずほリサーチ・テクノロジーズ

https://www.mizuho-ir.co.jp

[7]文化庁　「博物館の振興」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/index.html

[8]文化庁　「博物館への支援」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shien/index.html

第二部　2021年年度「海外フィールドスタディA」成果報告(1)

絵本づくりプロジェクト

藤阪希海　冨士純美詠　李澤宇

1 概要

1.1 授業の経緯

1.1.1 本来の課題

この授業の本来の課題は、兵庫県宍粟市にてフィールドスタディの基礎および調査手法を学ぶほか、過去の海外フィールドスタディの成果にもとづき、モンゴル現地学生とともに環境資源を活かしたものづくりや絵本教材の作成に取り組む事であった。

1.1.2 新しい課題

しかし、今年の事情では、宍粟市で調査方法を学び、実際にフィールドスタディを体験する。石鹸・ロウソク作り、絵本、カルタの三つの選択から、モンゴルを舞台とする絵本を作成することにした。

1.2 絵本作成にあたっての背景

1.2.1 絵本を作成する理由

絵本を作成する理由としてはまず客観的な要因であるコロナの影響で、モンゴル現地に行けなくなった。現地資源を利用できない。そして、絵本には環境問題を取り入れられることを考えて、環境問題をテーマにする絵本は人々のそれに対する関心を喚起できて、教育意義を持っている。また、人が理解しやすい形式のものを作りたいと思って、絵本は言葉が読みやすく、絵が描かれて、子供から大人までも楽しく分かりやすい。また2019年度の研修で先輩たちが絵本の作成を実現したという過去の成功例もあった。従って、最後に絵本を作成することにした。

1.2.2 ストーリーの候補

どんな物語を語るかを考えた時、ストーリーの候補として三つのアイデアを考えた。

一つ目は既に出版されたスーホの白い馬を踏まえて新スーホの白い馬を考える。具体的には、フランスの女の子がモンゴルの男の子と知り合うストーリーを参照して、馬がフランスの公園から逃げ出して冒険をしながらモンゴルへ帰っていくという物語を描く。これを書こうとしたきっかけとしては、小学校でスーホの白い馬の授業をすると、感情を喚起される子どもがいること、またスーホの白い馬の元になっていた馬が野生で絶滅したものの、ヨーロッパで保護されていたものをモンゴル国立公園へ連れてきた。小学校でスーホの白い馬の物語を知り、中学生になってからモンゴルへ行った日本人が、現地でその馬を見る物語があった。このように日本人によるモンゴルの語りの中で、気づきを得ていき、それによってモンゴルと日本をつなげることができる。

二つ目はオオカミに関する物語も考えていた。おじいちゃんはオオカミを殺すが、まだオオカミを信仰しているという女の子について描写するという候補があった。それは日本でオオカミが絶滅した後、モンゴルから青森の方へオオカミを連れてきて繁殖させるということであった。従って、オオカミはモンゴルと日本をつなぐきっかけとなるものと言える。

三つ目は遊牧民の物語を考えた。ドキュメンタリー映画『プージェー』を参照して、女の子は学校へ行っていて、夏休みに遊牧生活を送る家族の元へ戻った後の色々な感想が生み出されるようなアイデアがあった。

また二つ目のオオカミの物語と三つ目の遊牧民の物語は一つの物語に融合して描いていくこともあり得る。

1.3 活動内容

私たちの班は1月14日から1月16日まで三日間宍粟市でフィールドスタディーを行った。14日の前に授業ではフィールドスタディの意義と手法を学んで、過去の研修で作られた絵本について学習した。また事前調査としてネットでモンゴルに関するドキュメンタリー映画や映像などを調べて見た。藤阪さんは民族博物館でゲル、家具、家畜などを調べた。1月14日に初めて宍粟市で調査を行った。みんなは一宮町の歴史資料館で宍粟市４町の歴史や文化や特徴などを聞いた。1月15日に藤阪さんと冨士さんは宍粟市の絵本のあるカフェで色々な絵本について調査した。その夜、商工会長田会長と地域についてたくさん交流を行った。1月16日に、当地の伝統的な行事であるチャンチャコ踊りの名人にインタビューした。これらの活動に通じて、自分が宍粟市に関する知識を増やした一方、地域の歴史から生まれた文化はこの地域又は人に対してどれだけの重要さがあるかを知り、フィールドスタディの意味やその方法も身をもって体験した。

2 絵本の作成手順

2.1 シーンの分担方法

絵本の作成としては、藤阪さんがプロットを書き、各自が分担した箇所の内容を書いた後に、また結合してまとめてもらうという流れである。

・ゲルを畳む 冨士

・トラックに乗り込む　李

・トラックに乗って移動する　李

・大学の１日の流れ 冨士

・家に帰った後の家族との時間　冨士

・友達と遊びに行く 藤阪

・街中で美味しいものを食べる　藤阪

・趣味の時間　冨士

・星が見えない　藤阪

・大学夏休みに入る 藤阪

・砂漠を通って友達の家へいく　李

・遊牧生活の中で生み出される美味しいものを食べる　李

・動物と触れ合う　冨士

・友達と話す　藤阪

COFFEE

2.2 絵本のあらすじ

【登場人物】

・主人公：ナランゴア

・大学の友人：アリマ―、サラー

・遊牧民の友人：ガン

・ナランゴアの両親

【簡単なあらすじ】

モンゴルのある少女が大学進学を機に遊牧民の生活を終え、都会へ移り住む。都会の便利な生活を謳歌していたが、夜に星が見えないなど、生活の変化を認識し、何らかの寂しさを感じ始めた。遊牧民の友人の元へ戻ると、草原の砂漠化が進んでおり、自分が「関係のない人」になっていることに気づいた。遊牧民の生活に戻りたいが、戻れず、いつのまにか故郷のことが他人事になっている自分の現状に葛藤を覚えていた。

起：ナランゴアと彼女の家族が草原での遊牧民の生活を終える。

承： ナランゴアの生活の変化、都会の大学に通い、生活の喜びを知る。

転：星が見えないことで、生活の変化を認識する。

結：環境問題との直面、自分が砂漠化と「関係のない人」になっていることに気づく。

2.3 ストーリーの構成背景

【物語におけるゴール】

ナランゴアが感情を取り戻すこと。自身が遊牧民としての生活を「捨てた」背景として、都会の暮らしを理想化する社会体制に導かれていたことに気がつく。自身が納得できない選択をした怒りや生活を変える前の自分に戻れない葛藤を自覚し受容したうえで、次の選択に臨めるようになる。

【環境教育的な働き】

都会と地方の対比から、権力関係の産物として環境問題を捉え直し、読者が自身の在り方を考える機会を作り出す。

●資本の力によって物や人が集約する場と周縁化される場として、都会と地方を表現する。

●大人と子ども、健常者と障がい者、第一世界と第三世界と言ったように、環境問題の誘発と結びつきやすい属性と、環境問題による深刻な被害を受けやすい属性は異なる。人類はみな環境問題の誘発に貢献するとともに影響を受けているが、その貢献や影響の度合は、等しいものではない。この点において、環境問題は権力関係の結果として取り扱われる余地がある。

●環境問題の誘発と結びつきやすい属性を持つ（可能性がある）人は、そうでない人と比べ、環境問題の深刻な被害を受けやすい属性と結びつきにくく、他人事、あるいは「関係のない人」となりやすい。すなわち「関係のない人」は、「関係のない人」としていられる特権性を有している。本物語は環境問題を他人事のように感じる人を読者として想定し、「関係のない人」としてどのような行動ができるか、考えることを促す。

【具体的な表現方法】

●都会と地方の対比

○異文化の身近さ（第二外国語の選択理由）

○教育機会（図書館への距離）

●資本による資本のための理想化

○内面化された都市への憧れ（『大学ではどんな人に出会えるだろう？どんな楽しい生活になるのだろう？』『ほとんどの人が自分よりも大人びて見えた』）

○商用製品の存在感（バス停におけるシャンプーの宣伝、ショッピングモールでの買い物）

●地方の肯定に至る過程

○自然（星が見えない都会の空、草原の空気）

○栄養補給を最大の目的としない、食事そのものの楽しさ（コンビニのサンドイッチ→カフェのコーヒー→スーテーツァイ）

○人間以外の存在（家畜との暮らし）

●環境問題をめぐる不均衡性

○「関係のない人」の特権性（お金を必要とする遊牧民）

○資本を持ったうえで地方を肯定し、環境問題に気を配る余裕のある「関係のない人」（『盛夏に燦然と輝く景色には目もくれず、憧れと興奮に目を輝かせ』→『輝く緑はほとんどなく、見渡す限り延々と広がるのは砂の海』）

3 活動に通じる学び及び成果

3.1 スチンフ先生からの学び

スチンフ先生からは、事前学習から宍粟市でのフィールドワークにかけてモンゴル、自然との共生について幅広く教えて頂いた。事前学習から学習したことに、内モンゴルやモンゴル国の環境問題がある。都市化が進むにつれ、工場が立ち並び、排出される汚染物質による大気汚染が問題として挙げれられる。また、家畜の定住化によって、草の根まで食べつくしてしまい、草原地帯の砂漠化が進んでいる。民主化が進み、発展段階にあるモンゴル社会は良い方向に進んでいるようだが、環境問題に目を向けられていない現状がある。発展という可能性に負の面もあることを学んだ。環境問題以外に、市場経済導入による貧困や格差、若者の伝統文化離れといった問題も山積する。

宍粟市でのフィールドワークでは、実際にスチンフ先生のお宅でモンゴルの文化を体験させて頂いた。スーテーツァイ、モンゴル風の料理を頂いた。また、ゲルを縛る紐は馬の毛で、白い布は羊の毛でできているなど、ゲルの素材や仕組みを詳しく知った。絵本を作成するにあたって、モンゴルの遊牧民の生活や自然環境についても教えて頂いた。

モンゴルの遊牧民について

モンゴルの遊牧民は、家畜が草を食べつくさないように年に数回移動し、地域横断的な放牧をする。例えば、ゴビは150～200㎜の雨しか降らないが、ハンガイで半年暮らし、家畜を太らしまた元の場所に戻る。そのため、遊牧民にとって故郷の主な中心は決まってない。

遊牧民の生活と都市での生活どちらも送っている人もおり、夏は２～３週間、自分の家や友達の家に行き、草原に戻り馬乳酒飲みに行くことが主流である。

バスの移動や休憩の時間に聞いたお話

- 先生は、子どものころ氷が割れて水の中に落ち、お酒を飲んで体を温めた。お酒は薬である。
- 蒸留する機械を使って、牛の乳からお酒を作る。
- 馬乳酒はヨーグルトのようなもの。大抵お酒は入っていない。
- 牛糞でストーブを燃やす。
- 冬はゲルの中も氷点下になるが、下の隙間を牛糞で埋めて温めたらすぐ20℃くらいになる。

・寒いので雪は積もらないが、風が吹いたら飛んで行って溜まる。また、分厚く積もったら風で飛ばずずっとそのまま。スチンフ先生の家には、雪で顔を洗う習慣があった。

・「所有すること」を肯定する意識が薄く（＝土地など、すべてのものがすべてのためにあるものだという意識があり）、そのため客を歓待するような風習がある…？（モンゴルでは来訪者を丁寧にもてなすことが多い）

・オボー＝祈る場所。決まった形があるわけではなく、それぞれが作るものであり、国などが作ると規模が大きいものとなる。川沿いなどにあり、周囲の人が集まってきてみんなで祈ることも。アニミズムをベースに、チベット仏教、また中国文化の影響を受け、手を合わせて念仏を唱えるような祈り方をする。

3.2 調査結果

歴史資料館の職員の方や住民の方、チャンチャコ踊りの踊り手の方へのインタビュー

フィールドワークでは地域創生の観点から、宍粟市で生活される方々へのインタビューを行った。一見モンゴルや絵本作りとは直接関係しなさそうだが、モンゴルと宍粟市は共通した課題がある。モンゴルは発展するにつれて、鉱山開発や工場建設による環境問題、若者が伝統文化から離れていくという現状がある。宍粟市でも、少子高齢化が進み、時代の流れとともに若者は都市へ出て行ってしまう。都市への人口流出、地方の少子高齢化、伝統文化の衰退など類似した問題を抱える。宍粟市の伝統芸能は、「チャンチャコ踊り」と呼ばれる。室町時代以降、約550年前から始まった雨乞い祭りが起源とされ、10人ほどの子供たちが、笛・鉦・太鼓に合わせ、囃子唄を歌いながら踊る。現在、都市への人口流出、少子高齢化、地元の歴史に関心を持つ住民が少ないことにより、踊り手が不足していることが問題となっている。

宍粟市の活性化の取り組み

この課題への取り組みに、歴史を使った観光事業や外国人観光客の誘致、地元の食材の活用、コミュニティの場の提供が挙げられる。

モンゴルと宍粟市について調査して

今後の課題は、外にいる人々が地域の人々とどう関わるかということであると考える。スチンフ先生や上須先生は、地域の人々と信頼関係を築いた上で地域創生を進めており、外にいる者がどのようなアプローチで関わるかが大切であると感じた。外の人と村の人々との良好な関係を構築し、コミュニティの人々を巻き込み、村が自発的に働けるようにすることが重要である。たとえ、伝統文化がそのままの形で維持されなくとも、時代に合った方法で、何らかの形で伝統を残していくことができると考える。

4 感想

（李）

僕は小さい時から結構日本との関わりが深いですが、大学に入ってほぼ学校の授業を受けていて、限定された範囲で行動し、日本の民間まで入り込んでなくて、伝統文化なども身をもって実感したことがあまりない。なので、日本を真に入り込むことができていない挫折感が生み出されて、特にコロナ禍で二年間で、交流はあまり充実していなく有意義な生活を送っていないと感じた。従って、フィールドスタディーを通じて日本の深層の方面を体験したい。しかも、モンゴルは中国の隣国で、中国にも内モンゴル自治区があって、自分の知り合いの中にもモンゴル民族の人も数多くいた。しかしモンゴルに関して知識は薄くて、この授業に通じて、モンゴルの文化についてより理解を深めた。

絵本を実際に書く時、主人公がトラックに乗って都心部へ移動するシーンを描写する時、多少自分が大学進学するために両親に空港まで送ってもらった時の自分の心境を参照した。人を描く人物に共感させようとすると、まず自分は書くものを確信して共感することが大事だと思って、自分の感情を代入して書くようにした。

そしてストーリーの主人公は遊牧民を止めて、都市部に進学し、遊牧生活と疎遠になり、故郷の環境が悪化したことに気づく時、もし自分が遊牧生活を続けたらどうなるのかを考えたことがあるのであろう。それと同じく、私は中国国内進学を止めて、日本に進学しに来た。それで大学での生活が順調に進んでいない時も何回も考えたのは、もし、中国の大学に入ったら、色々な違う人に会って、色々な違う出来事があってよくなるのであろうか。それで私が得た感想は、全ては最善の結果であり、今の生活を大切にし、今自分が進む道に迷わず進めばいいと思う。

（冨士）

私はモンゴル語専攻で、自然との共生や地方創生に関心があったため、参加してみたいと思った。事前学習から宍粟市でのフィールドワークでは、モンゴルについて多くのことを学び、自分の地元を振り返る機会となった。絵本作りには、伝統の維持を今後どうしていくか、モンゴルの環境教育をどう改善するかなど、授業で学んだことや吸収したことが役立っていると思う。絵本を書くと決まってから、絵本を書いたことがなかったため、ワクワクしつつも、内心不安であった。しかし、先輩方がサポートして下さり、貢献することができて良かった。主人公が遊牧民のゲルを畳むシーンや、遊牧民の友人に会いに行くシーンでは、自分と重ね合わせていた。徳島県の小さな島で海や山に囲まれて暮らしていた生活から、大学進学を機に大阪に出てきた自分と重ね合わせ、主人公の気持ちがわかるような気がした。時代の流れについていきたいという気持ちや、都会に出て周りとの差を感じると、一層地元には戻れないと思った。

主人公の本当は故郷で暮らしたいけど、故郷には戻れないというのは、こういった気持ちかもしれないと思った。今回の海外フィールドスタディは、モンゴルの環境教育がテーマだったが、自分の地元を振り返り、モンゴルのことも学び、とてもためになった。今後は、引き続き地方創生に関心を持ち続け、モンゴル社会のことも学んでいきたいと思う。最後に、私は今回このフィールドスダディで出会った方々にとても感謝したい。スチンフ先生や上須先生、宍粟市の方々など、コロナ禍で大変な時だが、堅苦しい授業という枠組みを取り払い、温かい気持ちで様々なことを教えて下さった。地域の人との信頼関係の築き方を、実際に先生方の姿勢や行動から学ぶことができたと思う。藤阪さんや李さん、別の授業を受講している留学生との交流からもとても刺激を受け、多くの学びがあった。留学生の方と仲良くなり、中国のことがもっと好きになった。いつか、モンゴルや中国に訪れ、誰かとお酒を飲んでみたいなと思った。

（藤阪）

私は昨年から、ふるさとを失う可能性について考えている。現在の私は大阪に下宿しているが、出身集落の現在の住人は20人程度で、集落が消滅した場合のことを考える必要に迫られていた。そんな折に、「地域が抱える課題を調査、課題解決に協働で取り組むことを目的」とする本授業の存在を知り、考えを深める機会になると思って参加を決めた。

本章では、まず私が地元について感じていることを述べる。私の出身地域は宍粟市に近く、宍粟市の問題を他人事として書くことはできない。また、その内容は物語の執筆経験にも深くかかわるものとなる。次いで、宍粟市におけるフィールドワークと執筆を通して考えたことを記述する。

・私の問題意識

地域の課題を語る時、しばしば「地方創生」という言葉が用いられる。「地方消滅」の危機感に駆り立てられ、そこで課題となるのは人口減少の克服と経済成長だ[1]。今回のフィールドワークでは「地方創生」という言葉は使われなかったが、他の場所から人を惹きつけ、住人や収入を増やすことは幾度か話題に挙がった点で、問題意識は共通していた。しかし、私の関心事の中心は、都市部において広がる価値観との差異にある。以下は、性差別的意識に関して、2022年1月9日に友人に送ったテキストメッセージの抜粋だ。

> *個人的にさ、地方に住んでてしんどいのって、駅が遠いことでも店が少ないことでも人が少ないことでもなくて、理不尽がまかり通ってしまうことで。友達がパワハラとか性暴力とか受けている時に私が文句を言っても、文句を言う方が「おかしい人」になる。そもそも、私が文句を言うと居場所がなくなるのは私（大阪在住）じゃなくて、その友達なので、文句なんて言えるはずもない。だから結局、街に出ている限りそこの問題には他人事でしかいられないし、他人がどうこう言っても邪魔なだけというか。（略）女っていうだけでなめられるし、馬鹿にされるし、sexualizeされる人間の気持ち考えたうえで地方創生語ってみろ、と思ってしまう笑*

ここから、地域から人が減少する一因として、地域の価値観、特にジェンダー意識を問題視していることが伺える。兵庫県豊岡市では20代の転入者数の男女差の原因として「性別に基づき決められた社会的属性、機会等の格差」[2]に着目されるなど、地域のジェンダーギャップは課題化が進むところである。地域における生きづらさを知らず、あるいは目を逸らしたまま、人口減少等の課題解決は難しいと私は考えている。

なお、地域課題について「他人事」と述べているが、私にとって問題ではないという意味ではない。私は、大阪で生活すればするほど、限界集落で育った自分と他者との違いを意識し、物理的距離があるにもかかわらず帰属意識を増して感じるようになった。2021年1月に、授業で尊厳ある縮退[3]についてレポートを書いた際は、「自分のアイデンティティーの根幹を担う場所が終わるイメージを、明確に描き出すのがもはやしんどい」と文中に記し、さらに「人がいなくなっても帰りたいと思うのだろうか。果たしてその時、『帰った』と思えるのだろうか」と自問した。人口減少及び、その末に生じる地方消滅は、私の根幹を揺るがすものであり、深刻な問題だ。しかし、「女っていうだけでなめられるし、馬鹿にされるし、sexualizeされる人間の気持ち考えたうえで地方創生語ってみろ、と思ってしまう」私は、実情を知らない人間に地域課題を語られることに苛立ちを感じているからこそ、その地域に暮らさずして地域課題を語ることを避けようとする。地域課題に関心がないから「他人事」なのではなく、私自身に強く結びついた問題にして「他人事でしかいられない」ことを強調しておく。

・授業を通じた学び

本授業は、怒りと共に始まった。授業が始まってすぐ、モンゴルの環境に関する絵本を描くよう言われた。私はモンゴルに行ったこともなければ、その文化に馴染みもなかった。その状態で、モンゴルの何を知り得て、何を語れるというのだろうか。その場のことを良く知らない人間が知ったような顔で語るという、私がされたら嫌なことをやれと言われているように感じた。

絵本を描くことに、私の知り得ない必要性があるのかもしれないと自分を納得させ、どうにか折り合いをつけて絵本のプロットを考えた。その結果、自分のことを書くことにした。私が地元を大事にしたいが戻りたいと思えない場面があることと、主人公の状況を重ねて表現した。最も大事なこととして、何も知らないモンゴルの物語を紡ぐ、私自身に対する皮肉を込めた。遊牧生活をやめた主人公は、遊牧民の親類の元に遊びに行った際に、自分はもう遊牧生活に直接かかわる人間でないのだと痛感する。遊牧のやり方が環境に悪く、遊牧生活を追い詰めるものだと認識しているが、それを言えるのは遊牧で当面の生計を立てなくても良い「他人」であるからだ。すなわち、私がモンゴルの環境問題について滔滔と語ることができるのは、モンゴルで生活している訳ではない「他人」であるからだ。なお、詳しい内容については、絵本の構成についての章を参照されたい。

「他人事」である〈私たち〉

宍粟市でのフィールドワークは、私に２つの学びをもたらした点で重要なものとなった。第一に、研究をする人間は「他人事」になれる特権的な立場であり、私も確かにその一員であることだ。インタビュー中のやり取りから、学生や教授と、地元の方々との間に、ギャップがあることに気がついた。学生や教授は、聞きたいこと、伝えたいことを持ったうえで会話を展開しようとしていた。それに対して地元の方は、学生や教授の前提としている価値観が、自身の感じ方とかみ合わず困惑しているような場面が見受けられた。例えば、チャンチャコ踊りを残そうとする提案に対して、「民俗学的には面白いだろうが、楽しいものでもないし、自分たちはやりたくてやっている訳ではない」というようなことを言っておられた。

これは、研究に携わる〈私たち〉の特権性を象徴するエピソードである。まず、地元の方が「会話相手」として〈私たち〉に接していたことに対し、〈私たち〉は「インタビュー対象」として接していた。〈私たち〉は、個人の考えを持った１人の個人として尊重してもらいながら、情報を提供してくれる存在として相手を見ていたのではないか。「やりたくてやっている訳ではない」と言語化までさせるに至るインタビューが、地元の方の意思を汲み取りながら進められたと本当に言えるのか。さらに、幸か不幸か、〈私たち〉はただ「会話相手」とみなされる存在ではない。学問に裏打ちされた知識により、相手を説得する力を持つ。〈私たち〉が会話を遮って話を進めたり、相手の述べた言葉を飲み込めず〈私たち〉の想定を押し付けたりした時、相手は拒絶できたのだろうか。

フィールドワークを終え、振り返ってこれに気がついたとき、大変なショックを受けた。「他人」に自分のことを語られることが嫌いな私は、既に〈私たち〉の一員になっていた。無自覚にその特権を行使していた私は、それまでにフィールドワークでお世話になった宍粟市の方々や、地元の友人、過去の自分さえも裏切ったような気持ちになった。

続いて、宍粟市に根付いた価値観について、地元の人に尋ねた自分の在り方について考えた。冒頭で、私自身の地元に対する複雑な心情について述べたが、私は帰属意識を持つ地元に戻りたい気持ちがある一方で、ジェンダーギャップに苦しみ絶対に戻りたくないとも思う。そのため、フィールドワーク中に女性の権利について話を振ってみたが、相手にしてもらえず落胆した。若い女性が虐げられる空気が溶け出している場なのだと思った。

だがしかし、私の問いかけ自体が暴力性をはらんではいなかったか。私がそのような質問をできたのは、大阪に帰って来られるからだ。私が今を生きる場所は宍粟市ではなく、宍粟市で何を言ったとしても、その結果から逃げられる場があるからだ。地元を生きる私ではなく、〈私たち〉の一員としての私が、立場の暴力性を自覚せず質問した挙句に被害者面するのは厚かましいとしか言いようがない。

〈私たち〉が触れる痛み

その一方で、「関係のない人」であるからと何もしないのは、地元の人が問題を負い続けることを受容することである。それでは、あまりに〈私たち〉は無責任だ。そこで得られた第二

の学びは、関係のない〈私たち〉にはわからないことがあると胸に刻みながら、痛みに触れようとすることだ。

私の問いかけの暴力性に思い至った当初、地元の価値観に介入しようとするべきではないのかもしれないと一度考えた。しかし、地元の価値観に生きづらさを抱える人間がおり、しかもそれが１人でないことは事実だ。地方の価値観だからとすべてを無批判に受け入れる〈私たち〉を批判し、より抑圧されている人たちについて考えるべきだ。

人は、特定の価値観に身を浸して生きている。良いものも悪いものも、その価値観に溶け込んでいる限り、そのものがあることに気づき難い。存在に気づかなければ、そのものの良し悪しを考えることはできない。それどころか、批判の対象となったものを含む溶液、すなわち、自身の価値観や自己そのものが攻撃対象となったと感じても、何ら不思議ではない。突然もたらされる別の価値観は、毒になる。ただ、毒を必要とする人間もいる。

別の価値観に身を浸している〈私たち〉は、〈彼ら〉の価値観に溶け込んだものに気がつくかもしれない。溶け込んでいるものに触れても、溶け込んでいるものを見過ごしても、〈彼ら〉を傷つける可能性がある。〈彼ら〉の見る世界を知り得ない〈私たち〉は、〈私たち〉の気づきをもって言葉をかけ、それに返ってきた、あるいは返って来なかった感情表現や沈黙の意味を考え続ける必要があろう。私は、他者のことはわからないと肝に銘じながら、他者と私自身の痛みに近づき、その痛みの理由をほぐすことに貢献したいと思った。

〈私たち〉自身を受け入れる物語

フィールドワークを通じた学びは、私にとっての物語の意味を大きく変えた。構成はフィールドワークの前に済ませていたので、内容に直接影響していないが、結果的に主人公の変化は私の変化と重なるところとなった。

彼女も私も、もともと属していた〈彼ら〉の集団を抜け出して、〈私たち〉の一員となることを受け入れた。〈私たち〉は〈彼ら〉であった時、〈私たち〉に憧れていた。〈私たち〉の価値観に身を浸して初めて、〈私たち〉は〈彼ら〉に痛みをもたらす存在となり得ることを知った。それは受け入れがたい事であるが、一度〈私たち〉として生きることを決めた〈私たち〉は〈彼ら〉の一員に戻ることができず、身動きが取れなくなる。主人公は、遊牧民の友人の元を訪れたことをきっかけに、〈私たち〉の生活のしわ寄せを〈彼ら〉に担わせることを自覚するも〈私たち〉の生活に戻ってゆく。同様に、私はフィールドワークを通じて〈私たち〉の一員となったことを自覚し、そのうえで何をするか考え始めることができた。

人と向き合う怖さ

痛みに向き合うことは、換言すると人に誠実に向き合うということだ。それに関する怖さを述べて、私の感想を締めたい。

まず地方に知識を還元することを重んじる方針により、宍粟市において本報告書の内容を発表した。私はそのような方針を好ましく思っているが、大変怖いことだと感じた。正直なとこ

ろ、お茶を濁して発表した部分がなかったとは言い切れない。大事にしたい人々と、否定したいものが密接に結びつく場において、何かを否定した時に人を傷つけてしまうのではないかと怖かった。言いたいことを何も言えなかったように感じた。

逆に言えば、研究をする時、軽々に人を否定しまえる自分がいるのかもしれない。だからこそ、生きた人間の存在を認識せざるを得ない報告会において、それほどの恐怖を感じたのではないか。自分の学びの先にいる人たちの痛みを否定しない生き方を探りたいと思う。

5 参考資料

[1]中澤高志. (2016). 地方創生の目的論. 経済地理学会第 63 回大会プログラム報告要旨・予稿集, 9-32.

https://www.economicgeography.jp/wp-content/uploads/2016%E5%A4%A7%E4%BC%9A%E8%A6%81%E6%97%A8%E9%9B%86.pdf

[2] 豊岡市秘書広報課（編.）. (2019). 広報とよおか (Vol. 294).

https://www.city.toyooka.lg.jp/shisei/chihososei/1007000/1008845/1019241/1009222.html

[3] 対話を重ね、現在の生の充足感を取り戻しながら集落の終わりを考えること。

渥美公秀. (2020). 尊厳ある縮退によるコミュニティの再生と創生 ： 概念の整理と展望. 災害と共生, 4(1), 1-9. https://doi.org/10.18910/77173

第三部　2021年年度「海外フィールドスタディA」成果報告(2)

絵本原案

藤阪希海　冨士純美詠　李澤宇

天窓の閉鎖に使うウルフを取り去ると、遥か高くどこまでも続いているような青空（テンゲル）が綺麗に見える。丸く切り取られた空ともお別れかと思うと、感慨深い。ナランゴアの大学進学を機に、家族みんなでウランバートルに移住することに決めた。通学のためにも、学費を稼ぐためにも、都市部での定住は都合がいい。

「どうかした、ナラー？」

いつまでもゲルの中から出てこない私に、ロープを外しにかかっていたお母さんから声がかかる。朝っぱらから感傷にふけっていたのがなんだか恥ずかしく、私はあわてて「なんでもない、そっち行く」と返事をした。

親戚のおじさんにも手伝ってもらいながら、家族でゲルを畳む。外壁を3段に縛っていたロープから解放され、羊毛でできた白布が少し膨らんだ。私は手のひらにチクチクを感じなが

ら、お役御免となったロープをまとめていく。その間にも防水用の布、厚手の白布、屋根にかぶせていたフェルトがはがされ、放射状に広がる屋根の骨組み（垂木・たるき）が姿を現す。今まで使っていた家具や道具も全て、車２台にあっさり収まった。お父さんとおじさんがトラックに乗り、私はお母さんの運転するワゴン車の助手席に乗り込んだ。窓から後ろを振り返ると、私たちがそこに居た痕跡は、ゲルの形にぺったんこになった草だけになっていた。

「ウマもヒツジもいないのって、不思議な気分」

　思わずつぶやくと、お母さんはちょっとだけ間を置いて、こっちを見ずに「そうだね」と言った。

　ウランバートルへの移動は、たっぷり7時間はかかった。馬に乗って走り慣れた道はすぐに過ぎ去る。凸凹の道に体は揺れたが、私の心は弾むばかりだった。ワゴン車が風を切る音の中に、私の心音も響いた。大学ではどんな人に出会えるだろう？どんな楽しい生活になるのだろう？盛夏に燦然と輝く景色には目もくれず、憧れと興奮に目を輝かせてしゃべり続ける私に、それまで前だけを見ていたお母さんが呆れたように笑った。

「ナラーの想像力のたくましさは誇っていいよ」

　幼いころ、口伝えの昔話だけでなくオリジナルの寝物語を話してくれたのを思い出しながら、私は涼しい顔で応じた。

「母さんの子だからね」

　いつの間にか、太陽が今にも橙色を滲ませそうな時間になっていた。お尻に伝わる振動がおとなしくなるにつれて、窓の外に広がる緑が少なくなってゆく。確認できる轍の数は増し、土ぼこりが目立つようになる。街に寄り添うように密集したゲルが視界に入った。

「やっと着いたね」

　助手席で伸びをしながら、横顔に話し掛ける。前を走っていたトラックが適当な場所で停車し、私たちのワゴン車も近くに停まった。ハンドルを握ったまま、お母さんがぼやく。

「思ったより時間かかっちゃったなあ」

「日が落ちる前に、ゲルだけ建てたいよね」

　車を降りた私は、お隣さんが驚くほど近いことに異郷の地であることを感じつつ、いつも通りゲルの組み立て作業に入った。

新年度に余裕を持って引っ越したつもりであったが、新しい生活の準備をしていると時はあっという間に過ぎ、入学してからもう１か月が過ぎた。朝日を浴びながらあくびを噛み殺し、バス停を目指して歩く。当初は一番近いバス停の場所も知らず、不安でスマホを手放せなかったが、今では何も考えずとも、足が勝手に連れて行ってくれる。昨晩は課題に追われて夜更かしした上に、今日は１限があり5時に起きたせいで、はなはだしい寝不足だ。

朝早い時間であるにもかかわらず、大通りをたくさんの車が行き来している。横を通り過ぎたトラックの排気ガスをもろに食らい、私は手で口元を覆いせき込んだ。いつまで経っても、これには慣れない。これまでも学校は通っていたわけだし、車には慣れてるつもりだったのだけど。顔を顰めて歩いていると、間もなくバス停に到着した。近未来的な屋根の下に、デジタルサイネージが壁のごとく設置されており、豊かな茶髪をカールしたモデルが白い歯を見せつけながらシャンプーの宣伝をしている。

２か月前まで日常的に目にしていたバス停には、こじゃれた屋根もベンチもなかった。あまりに環境が違いすぎて、なぜ自分がこんなところに居るのか、いまだにわからなくなる時がある。自分がここに居られることを、それが許されていることを心底不思議に思うが、それをどう言い表したらいいのかわからない。圧倒。不安。気まずさ。どの言葉も合っているような、全然違うような気がする。ただ、銀色の箱たちは、私がそこに居続けるための努力をしてきた証なのだということは信じられた。自分がその箱の一部を形成しているのだということだけを考えて、私は前を向いて立つ。

タイミングよく、えんじ色に白い模様が浮かんだ、丸っこい車体のバスが滑り込んでくる。サラリーマンらしき人や、単語帳を片手に掲げた学生らに続いてバスに乗ると、朝特有の眠たげな、しかし１日が始まる緊張感をはらんだ空気が漂っていた。リュックサックを守るように前で抱え、車窓を流れる銀色の箱たちを見るともなく眺めつつ、今日１日の予定を頭の中で確認しながら大学へ向かう。

講義室に入ると、朝の挨拶を交わす学生たちの騒めきが広がっていた。それほど年齢は変わらないはずなのに、流行に乗っている（らしい）服装やお化粧の人に溢れていて、ほとんどの人が自分よりも大人びて見えた。少しの気後れと空元気を持って室内を見回すと、真ん中らへんの席に横並びに座り、お喋りに花を咲かせるアリマ―とサラーの後ろ姿が見つかった。

「おはよう」

新しい友人の存在に胸をなでおろし、平静を装って軽やかに声をかけると、アリマーはテンション高く目をまん丸にして、サラーはおっとり目を細めて「おはよう」と応じてくれた。私たちは、入学初日のオリエンテーションの時に席が近かったことをきっかけに、一緒にランチに行って仲良くなった。アリマ―は韓国アイドルが大好きで、音楽を聴くのはもちろん、推しのメイクやファッションも研究しているらしい。地方で生まれ、5年ほど前に家族とウランバートルに引っ越してきたと言っていて、親しみがわいた。サラーはウランバートルで生まれ育ち結婚して、2歳の子どもがいるという。「チヌアだよ」と、ご機嫌で砂場に座り込む幼児の写真をスマホで見せてもらった時、私とアリマーは「かわいい！」と甲高い声を上げた。さっぱりした性格のアリマ―、控えめなサラーと私の3人は、学部も同じで気が合うようで、取っている授業も被りがちだ。

「ずいぶん盛り上がってたみたいだけど、何の話してたの？」

アリマーの前の席にリュックサックを降ろしながら問いかけると、アリマーが一瞬答えに詰まる。代わりに、サラーが何かをこらえるように笑いながら答えた。

「アリマーの“推し”について」

ほうと相槌を打つと、アリマーが堰を切ったように喋り出した。アリマーのご贔屓のアイドルが所属するグループは人数も多く、センター争いが苛烈らしい。そこでセンターに選ばれるのが大変喜ばしいことであるのは言わずもがな。さらには、前日の夜に公開された新曲のコマーシャルに大きく映し出された“推し”が大変かわいらしく、今の感情を吐き出さないと私授業どころじゃない…とアリマーは顔を両手で覆った。

「ごめん、めっちゃ喋った。２人ともそんなに興味ないだろうに」

と最後に締めくくったアリマーの様子に、笑いをこらえていたサラーの気持ちが、ナランゴアはようやく理解できたのだった。くつくつと喉奥で笑いながら、フォローを入れる。

「いや、大丈夫。そこまで好きだとは知らなかったから、びっくりしたけど」

　アリマーは肩をすくめて縮こまるが、

「アリマーがそんなに勢いよく喋るのは初めて見たから、興味が湧いた。私も、その新曲見てみたいな」

　と続いた言葉に、アリマーは再び目を輝かせた。

「本当？じゃあ、後でリンク送るね！もし良ければ、良ければ見て！」

　そうこうしているうちに授業時間となり、科学技術社会論について先生が話し始めた。座る場所が教壇から遠過ぎたのか、黒板の文字が見にくかった。アリマーが私の背後から肩を叩き、小声で尋ねた。

「砂漠化の横、何年ごろって書いてあるか読める？せんきゅうひゃく…？」

「ええと…1960年。その下が、1999」

　身をよじって答えると、「ありがと」と短くお礼が返ってくる。私はかなり目がいい方なので、（私でも見えにくいんだから、他の学生はそりゃ大変だろうな）と考えつつ、必死に目をこらして板書する。学生が遅刻してきて、遠慮がちに後ろのドアの開く音がしたが、私の耳には入らなかった。

２限目が終わり、私たち３人は次の授業までしばらく時間があるため、ランチを済ますことにした。黄緑のラインがトレードマークの売店で食料を買い込み、カフェテリアの隅のテーブルに陣取る。私は「お腹空いた」と言いながら、サンドイッチの包装を慎重に剝がした。アリマーは金欠だからとご飯を買わず、カバンに入れっ放しだったチョコレートをつまんでいる。

「…ねえ、てか１限さ、文字全然見えなかったんだけど」

サラーが、菓子パンの袋を開けながらぼやいた。

「見えないよね！読ませる気ないなあと思いながら授業受けてたよ」

「それな。黒板小さすぎ。来週からもう少し前に座った方がいいかな」

「黒板をスマホみたいに拡大できたらいいのにねえ」

「そんな無茶な…でも、それ便利そう。誰かそういう設備開発してくれたらいいのに」

私は何とかすべての文字を読めたが、読みにくかったことに代わりはないので、ただ相槌を打っていた。

昼食を済ませカフェテリアを出ると、私たちは図書館へ向かった。前方に見えるレンガ造りの図書館を見つめながら、関心のため息交じりに私は言った。

「大学の図書館って財産だよねえ。私、図書館のために学費払ってもいいと思う」

スマホで時間を確認しようとカバンを探っていたアリマーが、顔を上げる。

「それはそう。まあ、図書館がない大学もあるけどね」

意外だという心の声が顔に表れていたのだろうか、アリマーを挟んだ隣を歩いているサラーが私と目を合わせ、「うちの大学は恵まれているんだよ」と言う。

「授業をするための、基本的な設備が整っていないところもあるからね」

「そうそ、私達が通っている大学は比較的いい方だよ」というアリマ―の発言を聞いて、ありがたいことだと思いながらも、いまいち腑に落ちなかった。ウランバートル市に住んでいるだけで、どこの大学の図書館でも簡単に訪れることが出来るし、そんなに問題なのだろうか。図書館には、教育、化学、歴史、数学…様々なジャンルの本があり、無限の可能性が広がる別世界に来たような、足場のない世界に突き落とされたような気持ちになった。

４限の外国語の授業が始まる前に、アリマーとサラーとは図書館前で別れた。アリマーは韓国語、サラーはフランス語、私は日本語を選択している。アリマーが韓国大好きなのは言わずもがなであるが、サラーはどうしてフランス語を選択したのか疑問に思って尋ねる。
「カフェ巡りとか好きで…。いつかフランスに行ってみたいなって」との答えが返ってき

た。私には２人のようにきちんとした理由はなくて、サラーに「ナラーは、なんで日本語にしたの？」と尋ねられた時、背中にじんわりと汗をかいた。初回の授業で聞いた情報を基に、何とかそれらしい理由をひねり出す。

「私は、日本語が…日本語は、モンゴル語に近いって聞いたから、興味が湧いて」

それを聞いた２人は納得した様子で、重ねて追求することはなく、私は詰めていた息を吐きだした。立ち去る時、おどけてアリマーが「アンニョン」と手を振ったので、サラーも「オフボワーハ」と優雅にお辞儀をし、私もあわてて「…サ、サヨナラ」ともごもごロにした。

午後の授業では、空気がこもりっぱなしで、どんよりした教室の雰囲気に辟易すると同時に、少しの憂鬱さを覚えた。

週末のある日。私は、アリマー、サラーと共に、大学から２ブロックほど離れたカフェを訪れた。クリーム色の外壁に、コーヒーカップのイラストが描かれた看板がかかっている。

「ここ、ずっと来てみたかったんだよね。普段はチヌアのお迎えがあるから、なかなかゆっくりできないし、嬉しい」

私が「そうだよね。今日はチヌアはお留守番？」と聞くと、「うん。今日はパートナーが見てくれてる」とサラーは歌うように返事をした。

一歩店内に入ると、コーヒーの香りが鼻腔をくすぐった。飴色に磨き上げられたカウンターの向こうでは、腕にタトゥーの入った店員が丁寧にコーヒーを入れていた。挽きたてのコ

ーヒー豆がみっしり詰まったフィルターに、円を描くようにしてゆっくりとお湯を注げば、コーヒーの粉は驚くほど膨らんでゆく。それを見たアリマーが、「コーヒーメーカーじゃなくて、手で入れてんだね」と言った。コーヒー好きのサラーが、いいところに気がづいたと褒める。

「お店で、豆の種類ごとに入れ方を研究してらっしゃって、ちょうどいい塩梅を探りながら手で入れてくれるんだって」

私は、サラーの知識もアリマーの目の付け所もすごいと、関心して見せた。

３人とも、コーヒーとサンドイッチを注文した。私は、苦みと深いコクが特徴的なブレンドコーヒーを一口飲んでから、サンドイッチに手を伸ばす。こんがりと焼き目が付いたパンに、レタス、ニンジン、紫キャベツ、チキンなどの具材がサンドされている。どこから食べてもこぼれそうな具材の量に戸惑いつつ、大きく口を開けてかじる。さっくりとした表面と、しっとりもちもちのパンの対比を楽しみ、続いて野菜の甘味や酸味が口内に広がっていく。目をまん丸にして、私は「おいしい！」と笑みをこぼした。サラーは眉を八の字にして幸せそうに同意し、アリマーは「ほんとに。このドレッシングの味は何？」と至極まじめな顔をして問うた。授業の合間の補給ではなく、３人でゆったりと楽しむランチタイムは初めてだったが、私にはどこか懐かしい感じがする時間だった。

カフェを出た後、３人はショッピングモールへ出向き、衣料品だの、化粧品だの、雑貨だのを見て楽しんだ。アリマーの“推し”のグッズが売られているお店も入っており、商品を眺めながら聞いた、アリマーのライブ参加経験談は興味深いものであった。

店を出て家路につく頃には、辺りは暗くなっていた。楽しかったと言い合いながら、私たちは並んでバス停までの道を歩く。私は、ふと空に目をやる。のっぺりとした黒い空の中を、モールのひときわ大きな看板のライトが照らし出しており、驚愕して足を止めた。

「空が青い！」

強い光に照らされた夜空は、何もかもを吸い込むような黒色を失い、うっすらと雲を背負った青空の姿をしていた。空は常に青くて、光が失われた時に黒く塗りつぶされるのかと、私はいたく感激した。２歩前を行っているアリマーとサラーが振り返り、怪訝な表情を浮かべる。私は空を指さして「夜なのに、空が青い！星じゃなくて、雲が見える！」と声を上げるが、２人は「ああ」「ライトね」と言っただけだった。黒いキャンバス一面に星を溢したかのような夜空しか知らない私にとっては、夜空も青いというのは大発見で、アリマーとサラーの反応は不服であった。私の内心は露知らず、２人は会話を続けた。

「夜空が青いのが衝撃か、なるほどなあ」

「ナラーの住んでた草原では、星がいっぱい見えたんだね。いいなあ」

「え、何がいいの？」

私が思わず問い返すと、サラーはもう一度同じことを言った。星がいっぱい見えていいな、と。アリマーが、サラーの言葉を補うように続ける。

「ずっとこっちに住んでると、星を見る機会なんて本当にないもんなあ。私もウランバートルに引っ越してくる前に、近くの天文台で星を見てさ。その時は『こんなん見てどうするんだ』ってすぐ飽きちゃったんだけど、こっちに住みだしてから、星も綺麗だと思うようになった」

私の捨て去った、かつての生活の一部を褒められ自慢するような気持ちと、そんなものに価値を置いてどうするのだと冷めた気持ちが入り混じり、私は言葉に詰まった。よくわからないモヤモヤを抱えたまま、「そういうもんかな」とだけつぶやいた。

あっという間に１年が経ち、大学は夏休みに突入した。私は、幼いころからの友達で遊牧生活を続けている、ガンの元を訪れる約束をしていた。SNSでやり取りしていたとは言え、長らく会わなかった友人相手にどう会話を切り出すべきか、浮足立って考えていた。

私たち家族は、お父さんの運転するワゴン車に揺られ、１年前にウランバートルへ通ってきた道を逆走していた。助手席に座ったお母さんが「どのへんで運転交代しようか？」と切り出し、お父さんと１日の計画を相談し始める。

手持無沙汰な私は、座席に身をゆだね、ぼんやりと外に視線をやっていた。１年前とさほど変わっていないはずの車窓の景色はしかし、私に違和感を抱かせた。

「…ねえ、こんなに草減ってたっけ」

思わず呟くと、お父さんが前方に視線を留めたまま「え？」と聞き返す。振り返ったお母さんが、私の視線の先を追って「ああ」と軽い調子で言った。

「草ね。減っちゃったよねえ。母さんが子どものころは、この辺一面草原だったんだけど」

「え、昔ここまで来たことあるの？」

「ある、ある」と請け負ったお母さんは、笑いながら思い出話をした。

「確か、ウランバートルの方でＤａａｒａレースがあったらしいね。母さんがまだ小さかったときだから、あんまり覚えてないけど。家族みんなでレースに参加しようって行ったんだけど。どこまで行っても草、草、草で、景色も変わらないし、母さんが退屈してぐずり出したんだって。お母さん…ナラーのおばあちゃんが、『あの時はあんたをなだめるのが大変だった』って何回も喋ってたから覚えてる」

お母さんの話の中の景色と、目の前に広がる景色はまるで別物のようだった。輝く緑はほとんどなく、見渡す限り延々と広がるのは砂の海だった。

「そんな…そんな違うんだ、たかが数十年で」

「まあ…ねえ、本当にここ数十年だよね。火力発電とか、森林伐採とか、一気に増えたの」

　というお父さんの言葉に、パズルのピースのはまるべき場所をひらめくかの如く、つい先月まで受けていた大学の授業の内容が想起された。曰く、モンゴルでは、砂漠化が急速に進んでいる。その原因には、火力発電、森林伐採はもちろん、空気汚染、鉱山開発、地下水の使い過ぎなど様々な事柄が挙げられている。中でも最大の問題とされているのが、過放牧。家畜の数を増やした結果、草が食べられるペースに再生速度が追い付かないらしい。初めてそれを聞いたときは、背中を冷たいものが流れるようだった。とは言え私はもう放牧生活をしていないからと、記憶の彼方に追いやった知識だ。今の今まで忘れていた問題を目前に突きつけられ、その重大性を実感し、暑い季節であるにも関わらずぞわりとした。

　ウランバートルへと向かう車とすれ違うと、タイヤの巻き上げた砂が目に付いた。（１年前にも見てるはずなのに、全然目に入ってなかった…）砂が衝撃を吸収し、静かに沈み込むような車体の揺れを、私は確かに知っていた。新しい生活への期待を膨らませていた当時の私は、気にも留めていなかった。（いや、問題だと思っていなかったから、目に入らなかった。知ってるけど、知らなかったな。）

　たまらない気持ちになってドアガラスを降ろすと、生命の揺らめきは感じられず、かそけくも破壊的な空気に額がひりついた。遠くの方で、赤と白の煙突から途切れることなく煙が立ち上るのが見えた。教科書に載っていた火力発電所の写真が、脳内で重なった。

ガンの家族のゲルにたどり着いて車から降りると、記憶と違わぬ風を胸いっぱいに吸い込んだ。空気がおいしいと思ったのは、人生で初めてだった。夜の到来を感じさせる虹色の空と、私の立つ地面の境界線が溶け合っていて、吸い込まれてしまいそうだった。

「ナラー！」

車の音を聞いて私の到着を知ったガンが、走ってきたままの勢いで抱き着いてきた。肩越しに、ガンの両親の姿が目に入る。

「ガン、久しぶり！元気にしてた？」

「私は変わらず元気にやってるよ！」

ガンは、アッシュブラウンに染めた私の髪を見て、目を細める。

「ナラーはおしゃれに目覚めたね？」

「そんなんじゃないよ。友達に勧められて、ちょっと試してみただけだって」

以前と違う自分でここに立っている誇らしさと恥ずかしさから、無意識にTシャツのすそを引っ張る。ガンはそれ以上追求せず、「立ち話もなんだし、ばあちゃんがスーテーツァイを入れてくれてるから、中入ろう」とゲルへと私を誘った。

泊り用の荷物を両手に抱え、一番大きなゲルの中に入ると、ガンのばあちゃんが「いらっしゃい」と迎えてくれた。ゲルの天井の高さに合わせ、高さが低めのテーブルに通される。ピカピカのカップを受け取ると、赤みを帯びたクリーム色の表面が輝き、くるくると踊っては湯気を立てた。私はカップに口を付け、バターと穀物の香りを吸い込む。ミルクのこっくりした味にほおが緩み、「おいしい」という言葉があふれ出た。

「そんなにおいしそうに飲んでくれたら、作り甲斐があるよ」

とばあちゃんが言うので、お父さんが照れたように言った。

「最近みんな忙しくて、ツァイを入れることもなかなかなくて」

その言葉に首を振って同意を示しながら、そういえば昔は何かあるたびに、何もなくてもツァイを飲んでいたのになと思いを巡らせた。

寄宿制の学校に通っていたころ、休みにはお父さんが車で迎えに来てくれて、家に帰るとお母さんがスーテーツァイを沸かして迎えてくれた。そういう日は仕事を早めに切り上げ、家全体にゆったりとした時間が流れていた。お母さんは御玉でス―テーツァイを混ぜながら、ゆるく結った髪を肩に流し、私の目をのぞき込んで聞いた。

「ナラー、学校はどうだった？お友達と仲良くしてる？」

「うん、カラも一緒だし、楽しい！あ、あのね、アンナって子とお友達になったよ。アンナはすごいんだよ」

体育の授業の時にね、と話し続ける私に、お母さんはうなずきながら、笑顔でツァイのはいったカップを手渡してくれる。話に区切りとつけると、私はテーブルにつく。カップにふうふうと息を吹きかけ、やけどしないようゆっくりと啜る。馴染み深い味に力が抜けて、家に帰ってきたのだとしみじみ感じるのだった。

ヒツジ一頭を以てガン一家の歓待を受け、お腹いっぱいで眠りについた翌日。顔を洗いにゲルの外へ出ると、橙色のバケツを手にしたガンが目に入った。「おはようガン、馬の世話？」と大声で呼びかけると、「そう、ミルクを絞る！仔馬を離すの手伝ってくれる？」と、同じくらいの声量で返ってくる。了解の返事をして、最低限の支度をしてから大急ぎで馬の元へ向かうと、母馬の脇腹に鬣を擦り付けている仔馬がいた。母馬の半分もないサイズでかわいらしい仔馬だが、なかなかどうして力が強い。遊牧生活をしていた時は毎日触っていたが、今の私には１年のブランクがある。当時の感覚を思い出しながら、「よし、いくよ！」と気合を入れて仔馬を捕まえる。仔馬を押える手のひらに、仔馬の温かさと脈、そして母馬を求めて身をよじる動きが伝わった。仔馬は思ったほど抵抗を示さず、あっさりと杭にひもで繋がれてくれた。思わず「この子おとなしいね」という言葉が口からこぼれ、その瞬間10年も前の記憶が鮮やかによみがえった。

私が学校で、友達の家の馬がＤａａｒａレースで優勝したという話を聞いた翌年。我が家の自慢の馬にも晴れ舞台を用意してやるんだと、私とお父さんは意気込んだ。2人で画策した結果、地域で開催された仔馬のレースに、一番大きな仔馬を出場させることにした。しかし、仔馬は全身で抵抗を示し、何度引き離しても母馬の元へ戻ってしまうので、別の子を出馬させる他なかった。家族親戚総出で応援したが、肝心の仔馬はやる気なさげな様子であった。私たちは、先頭馬を探すのは早々にやめて、最終馬はうちの馬かもしれない、などと言いながら騒いだ。最終的に、最後から３番目の順位でゴールしたうちの馬は、こんなことに付き合わせやがってとでも言うように、不機嫌な様子であった。私が「お疲れ様」となでてやると、しっぽをゆらゆら揺らしながら草を食む。お母さんがけらけら笑いながら、「うちの馬たちは競争が嫌な子ばっかりだね」と言った。「そうなの？」と顔を覗き込むと、世界にうちの馬を自慢できなくて不満げな私の顔が、黒々とした馬の目に写りこんでいた。

「終わり！ありがとう、ナラー」

気づいたら、ガンは乳しぼりを終えていた。

「早かったね」

「そう？こんなもんでしょ」

などと言い合いながら、私たちはゲルへと戻る。ガンが「後で馬乳酒を作ろう」と言うので、これまた長らく口にしていない、独特の香りと酸味を思って唾液が湧いた。

「ウランバートルに染まっちゃったナラーの口には合わないかな？」

ガンがおどけて言う。私は、胸の内に冷たいものが落ちるような心地がした。「そんなわけないじゃん」と口をとがらせて、拗ねたふりをして見せる。ガンは「ごめん、ごめん」とカラカラ笑ったが、モヤモヤは晴れなかった。

私の周りに渦巻く嫌な空気を振り払うように、あたりを見渡す。すると、ヒツジたちの集団が目に留まった。

「ヒツジ、増えたねえ。前よりかなり多いんじゃない？」

「そう、来年は弟が高校卒業して、大学行きたいって言うからさ」

弟の学費のために、高く売れるヒツジの数を増やしたのだ。

（いや、これ話題の転換先を間違えたかも。）過放牧、という言葉が思い浮かぶ。私は、ウランバートルの道すがら目にした、砂の海に思考をやった。粒の小さな砂の山は美しく、しかし生命の存在を感じさせない厳しい景色。大好きなガンやその家族の行動が、あの景色を生み出すと思うと、心に暗雲が立ち込めるのを感じた。砂漠も悪いものではないのかもし

れない。でも、草原の気持ちよさを知っている私は、生活の場であり生命に溢れた場が、あんな風に変わり果ててしまうことを受け入れられなかった。（なんでそんなことするの）と怒りに近い不満が噴出した。

「ねえガン」

そういうことすると砂漠化が進む、と言おうとして、突き動かされるように口を開いた。しかし、それは音にならなかった。冷静な私が、（それを言って、何になるの）と私自身にストップをかけた。ヒツジを増やさなかったら、どうやってお金を稼ぐの？お金を得られなかったら、ガンの弟の学費は誰が払うの？困るのは誰？…少なくとも、私は困らない。

でも、ヒツジの数を増やして、草原が減って、移動できる場所が減って、一番困るのも私ではない。困るのはガンの方だ。ガンや彼女の家族は、それに気づかずヒツジの数を増やしたのだろうか？それとも、わかっていて、でも他にどうしようもなくて、それを選択したのだろうか？もし、自分たちの首を絞めるのを知りながら、他にやりようがなくてヒツジの頭数を増やしたのであれば、それはどんな気持ちなのだろう。

ガンに尋ねたら、その疑問の答えはすぐにわかったのかもしれないけれど、私は聞けなかった。何て聞いたらいいのかわからなかった。たぶん、答えを聞く覚悟もなかった。私の脳裏には、夜空を青く輝かせるライトと、砂漠に聳え立つ煙突が浮かんでいた。私とガンは肩が触れそうな距離にいるのに、間に越えがたい隔たりがあるような気がした。

名前を読んだきり沈黙してしまった私に、ガンが「どうしたの？」と尋ねる。私は、お気に入りのヒツジを探していたふりをして、「…ううん、やっぱりあの子が一番美人な気がする」と唸り、ガンを笑わせた。

ガンの家で手伝いをした５日間はあっという間に過ぎ去り、ウランバートルへ帰る日になった。私たちが持ってきた荷物は再びバンに積み込まれ、あとは車に乗って出発するばかりだ。ガンが私の背中に手を回して、「またいつでも帰っておいでね」と言った。私は、帰る、という言葉を唇だけで反芻した。ガンの優しさと、ウマの食んでいる草のみずみずしさと、今朝食べたチーズが入り混じったような香りが鼻を掠めた。私は「うん、また」と返事をしながら、ひどく冴えた頭の隅で（ここはもう私の帰る場所じゃない）と確信した。

ウランバートルでの生活が長くなればなるほど、私は“遊牧民”なのだと強く意識するようになっていた。日々の関わりの中で積み上げられる小さな違いの数々に、私はアリマーやサラーとは違うのだと思うようになっていた。

でも、私の鼻にはもう、排気ガスと化粧品ショップの匂いが浸みこんでいる。草原は、もう私の居場所じゃない。ずっと薄々感じていたことだった。この５日間、ウランバートルに出るまで当たり前だったものにたくさん触れた。私の大事なものは、家族と飲むスーテーツ

ァイや、ウマの背中から見る景色や、夏に青々と茂った草のかたちをしていたことを、初めて知った。そして、それらはウランバートルまで持っていけなかったのだと気がついた。

ついぞ、ガンに「ヒツジの数を増やし過ぎなんじゃない？」とは言えなかった。大学での学びは私の生活の支えだけれど、ガンにはわかってもらえないと思った。本当にガンはわかってくれないのか、私がわかってもらえないと思い込んでいるのか、私にはわからなかった。ただ、私の言葉は、かつての私の言葉と違うものになってしまったのだということはわかった。私は変わらずガンが好きだけれど、以前のように何もかも話せる存在ではなくなったことを悟った。

どうすれば良いのか、途方に暮れてしまう。私は、自分の大事なものを草原の暮らしの中に見つけたのに、既にその生活は私の手の内にないのだ。私は、ウランバートルの生活を知らなかった私には戻れない。（物語だったら、都会に出た女の子が田舎の良さを思い出して、遊牧生活に舞い戻ってハッピーエンドになるだろうに…。）現実はずっと難しい。今の私は何を選択しても、ハッピーエンドは夢のまた夢だと思った。引き返せないところまで来ないと、大事なものに気づけなかった自分が腹立たしい。でも、ここまで来ないと気づけなかったのだろうということも、うっすらと察していた。私は、ウランバートルに憧れざるを得なかった。そして遊牧生活をやめた後に、遊牧生活を恋しく思わざるを得なかった。

何もかも最悪だけれど、最悪だと知っていることだけは良かったと思った。

ガンが、私から体を離す。私は、うら寂しさと腹立たしさが入り混じり、泣きたいような気持ちになった。彼女からも、この場所からも離れがたかった。「じゃあ、行こうか」というお父さんの声を合図に、私はガンに背中を向けて車に乗り込んだ。

「またね」

ドアを閉める直前に、ガンがほほ笑みながら再び言った。日焼けした頬の桃色が、愛おしいと思った。

「うん、また」

私は微笑み返し、ガンの目を見て強くうなずいた。遠くの空で、分厚い雲が影を落としながら流れていった。

監修・編集・執筆・現地調査協力者

監修

思沁夫　　大阪大学グローバルイニシアティブ・センター

編集

阿部朋恒　　日本学術振興会

執筆

藤阪 希海　　大阪大学人間科学部人間科学科　4 年生
冨士　純美詠　　大阪大学外国語学部　2 年生
李澤宇　　大阪大学工学部機械工学科　3 年生
劉桐坤　　大阪大学経済学部経済経営学科　3 年生
明語盈　　大阪大学経済学部経済経営学科　3 年生

現地調査指導・協力

長田博　　宍粟市商工会会長
大谷司郎　　山崎郷土研究会会長
西山大作　　公益財団法人しそう森林王国観光協会常務理事
小鹿由加里　　ぷくぷく宍粟
中畑俊博　　宍粟市一宮町横山ちゃんちゃこ踊り保存会会長
上林善博　　上林建設株式会社社長

出会いからはじまるフィールドスタディ

大阪大学未来基金グローバル化推進事業
海外フィールドスタディプログラム A　2021 年度報告書
環境問題への回路 II　2021 年度報告書

2022 年 3 月 31 日　初版第一刷発行（非売品）
監修：思沁夫
編集：阿部朋恒
発行：大阪大学グローバルイニシアティブ・センター
〒565－0871　大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL 06-6879-4017 FAX 06-6879-7106

©2021 Center for Global Initiatives, Osaka University